動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号（動力車会館）
電話｛（鉄電） 千葉 2935・2936番
（公） 043（222）7207番

96.7.15 No. 4431

千葉転 休勤拒否の闘争へ

場合によっては指名ストも！

分割・民営化以来十年間の攻防戦に決着をつける闘いが開始されている。われわれは、国鉄闘争の新たな正念場にあたって、恒常的なストライキ体制を確立した。われわれは、この闘いを背景として、当局とJR総連・革マルの結託体制による新たな動労千葉破壊攻撃を粉砕する！新たな闘いの火ぶたは切って落とされた。組織の総力をあげて闘いに起こう！

一二〇日を超す年休が流れた！

千葉支社は、夏季輸送の中軸を担う千葉転への助勤操配を頑なに拒んだまま、七月二〇日からの夏季輸送に入ろうとしている。千葉転に助勤操配を行なわないどころか、当初は、この春から千葉転に来ている助勤すら6月に、元区に戻してしまおうとしていたのである。千葉転では、今年三月末には、一二〇日を超す年休が時効で流れている。いくら年休を申し込んでもほとんど入らないような状態のなかで流れているのだ。そして、夏季輸送に至っても要員操配すらしない。こんなことは断じて許せない。

デタラメの限り

以前にも報じたとおり、夏季輸送に全く関係ない区で士職の要員は余裕があるのだ。例えば習志野運輸区は十二名の過員をもっている。千葉支社は、そのうち八名を車掌に下位職充当するために助勤を送れないというが、それでもまだ四名の余裕がある。しかも車掌は、七月末には、現在見習いをしている八〇名あまりが仕上がるために、士職の下職充当も実際は七月末までである。八月に入れば、習志野運輸区では、一二名もの余裕をもつことになる。京葉運輸区もほぼ同じような要員状況だ。

もっと言えば、そもそも「運転士を車掌に充当しなければならないので千葉転への要員操配はできない」などという理由自体ウソなのである。千葉支社は、五月の夏季輸送提案の時点では、「運転士を車掌に下ろさなくても夏季輸送は回る見通しです」と言っており、その時から「夏季輸送に向けた士職の要員操配の考えはない」と言い続けていたのである。そもそも、鼻っから要員操配などするつもりはなかったのだ。

そして団交では、九月に全体の要員操配を行なうと言うのだ。九月にできる要員操配が、何故今できないのか！何ひとつ理由はない。九月に全体の要員操配をすれば、当然、千葉転に来るだけではなく、千葉転から他区へ出る要員操配も想定される。来た者は約三ヵ月の線見訓練が必要だから、秋臨の多い時期にまたギリギリの要員で年休もとれないないような状況が続くことになる。

不当労働行為が本業となった！

やることなすことが全てデタラメだ。結局、全ての判断が労務政策なのだ。習志野や京葉など、JR総連の多い区は優遇し、動労千葉の多い区は徹底的に痛めつける。これが、常に彼らの判断の最優先事項なのだ。業務が正常に回ろうと回るまいと関係ないという構えである。

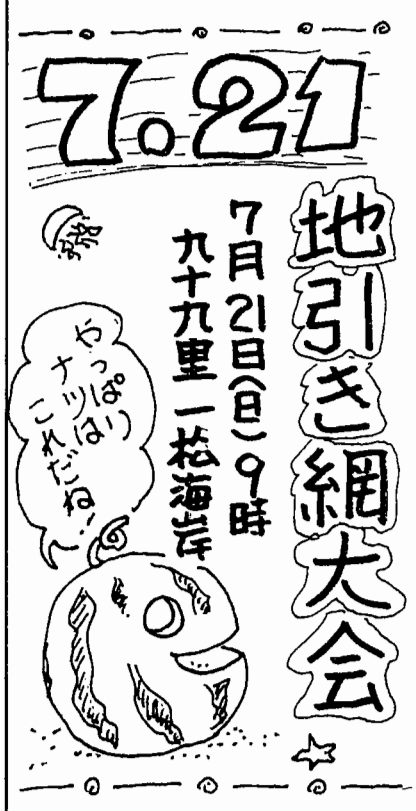
その典型が強制配転者の塩漬け攻撃である。車掌が足りないなどというが、動労千葉の運転士を十年にも及んで配転し続け、他方、入った新採は、一年で全て車掌、その翌年には全て運転士、という促成栽培をやり続けた結果起きていることだ。車掌は車掌として何年か経験を積ませ、運転士には、動労千葉の組合員を戻していればこんなことは起きていない。JRは、鉄道を本業とする会社から不当労働行為を本業とする会社に変質してしまっているのだ。これが、十年に及んで革マルと結託し続けたJRの行き着いた結末である。

闘いの火ぶたは切られた！

われわれは、七月二〇日からの千葉転支部を拠点とした闘いをもって、JR体制打倒に向けた正念場の国鉄闘争に突入する。われわれは、千葉転において、休日及び時間外労働を拒否する闘いに入る。場合によっては指名ストライキを実施する。これは闘いの開始である。

木更津支区における脱退工作問題も絶対看過できない。われわれは、この闘いも、支社及び支区長に謝罪させるまで闘う決意だ。ひらき直り続けるならば、必ずここでも闘いの火ぶたを切る。幕張の有機溶剤問題もそうだ。未だ現場はひらき直り続けている。

JRとJR総連・革マルの結託体制は今やガタガタだ。足元が崩れ落ちようとする危機のなかで彼らは、唯一の延命の道を動労千葉・国労破壊に求めている。今こそ、JR体制打倒の闘いに全力で決起しよう！



新たな10万人合理化粉砕！ 労働運動の新たな潮流めざし全国へはばたこう！